

塵

点

録

六十

049
ア3
60

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9

品目	年月日
書課	昭和28年

子字 天降粟 引玉中黑

暮府國輝 命 位貴知真身 鄙

瓦礫代作黃金 立 珮習信

塵點錄

接粹

抄本

A04	A041
73	73
60	60

熙朝樂事

字抄

雜集

神佛之說



熙朝樂事

錢塘

田汝成



40303

正月朔日官府望闕遙賀禮畢即盛服詣衙門往來交慶民間則設奠於祠堂次拜家長為椒栢之酒以待親戚隣里以春餅為上供爇栗炭於堂中謂之旺相貼青龍於左壁謂之行春挿芝麻梗於簷頭謂之節節高簽栢

技於柿餅以大攜キツ之謂之百事大吉自此少年遊冶翩翩徼逐隨意所之演習歌吹或投瓊買快闔九翻牌博成賭間舞棍踢毬唱說平話無論晝夜謂之放魂至十八日收燈然後學子收書工人返肆農商各執其業謂之收魂

立春之儀附郭兩縣輪年遞辦仁和

縣於仙林寺錢塘縣於靈芝寺前期十月縣官督委坊甲整辦什物選集優人戲子小妓裝粉社夥如昭君出塞學士登瀛張仙打彈西施採蓮之類種種々變態競巧爭華教習數日謂之演春至日郡守率僚屬往迎前列社夥殿以春牛士女縱觀闐塞市街競以麻麥米豆拋打春牛其優人之长假

以冠帶騎驢叫躍以隸卒圍從謂之
街道士過官府豪門各有贊揚致語
以獻利市遇襍褻猥漢衝其節級則
褻而枝之亦有謔浪判語不敢與較
至府中舉燕鞭牛而碎之隨以綵鞭
土牛分送上官鄉達而民間婦女各
以春幡春勝鏤金簷綵為燕蝶之屬
問遺親戚綴之釵頭奉酒則縷切粉

皮雜以七種生菜供奉筵間蓋古人
辛盤之遺意焉耳

二月朔日唐宋時謂之中和節今雖
不舉而民間猶以^テ青囊^ツ盛五穀瓜果
之種相遺謂之獻生子自是城中士
女已有出郭探青掃墓設奠者湖中
遊舫倩價日增矣二日士女皆戴蓬
葉諺云蓬開先日草戴了春不老

二月十五日為花朝節蓋花朝月夕
世俗恒言二八月為春秋之中故
以二月半為花朝八月半為月夕也
是日宋時有撲蝶之戲今雖不舉而
寺院啓涅槃會諗孔雀經拈香者麝
至猶其遺俗也

三月三日俗傳為北極佑聖真君生
辰佑聖觀中修崇醮事士女拈香亦

四月八日俗傳為釋迦佛生辰僧尼
各建龍華會以盆坐銅像浸以糖水
覆以花亭鏡鼓迎往富家以小杓澆
佛提唱偈誦布施財物有高峯和尚
偈云呱聲未絕便稱尊攬得三千海
嶽昏惡水一年澆一度知他雪屈是
酬恩

端午為天中節人家包黍秫以為粽

束以五色綵絲或以菖蒲通草雕刻
天師馭虎像於盤中圍以五色蒲絲
剪皮金為百虫之像鋪其上却以葵
榴艾葉攢簇華麗或以綵絨雜金線
纏結經筒符袋互相饋遺僧道以經
筒輪子碎惡靈符分送擅越而醫家
亦以香囊雄黃烏髮油香送於常所
往來者家。買葵榴蒲艾植之堂中

有詠家啟醮酌水獻花者是日觀中
有雀竿之戲其法樹長竿于庭高可
三丈一人攀緣而上舞蹈其顛盤旋
上下有鷄子翻身金鷄獨立鍾馗抹
額玉兔搗藥之類變態多方觀者目
眩神驚汗流浹背而為此技者如蝶
拍鴉翻蘆々然自若也是日男女皆
戴薺花

清明從冬至數至一百五日卽其節也前兩日謂之寒食人家插柳滿簷青舊可愛是夜人家貼清明嫁九娘一去不還鄉之句於楹壁謂如此則復日無青蟲撲燈之擾僧道採楊桐葉染飯謂之青精飯以髓施主立復之日人家各烹新茶配以諸色細菓餽送親戚比隣謂之七家茶

標以五色花紙貼畫虎蝎或天師之像或朱書五月五日天中節赤口白舌盡消滅之句揭之楹間或採百艸以製藥品覓蝦蟆以取蟾蜍書儀方二字倒貼於楹以辟蛇虺立秋之日男女咸戴楸葉以應時序或以石楠紅葉剪刻花瓣撲插髮邊或以秋水吞赤小豆七粒

七夕人家盛設瓜果酒穀於庭心或樓臺之上談牛女渡河事婦女對月穿針謂之乞巧或以小盒盛蜘蛛次早觀其結網疎密以為得巧多寡市中以土木雕塑孩兒衣以綵服而賣之號為摩睺羅

七月十五日俗傳為中元節地官赦罪之辰人家多持齋誦經薦奠祖考

攝孤判斛屠門罷市僧家建盂蘭盆會放燈西湖及塔上河中謂之照冥官府亦祭_ニ郡厲_一邑厲_一壇_一

八月十五日謂之中秋民間以月餅相遺取團圓之義是夕人家有賞月之燕或携盃湖船沿遊徹曉蘇堤之上聯袂踏歌無異白日郡人觀潮自八十一日為始至十八

日最盛蓋因宋時以是日教閱水軍
故頌城往者至今猶以十八日為名
非謂江潮特大于是日也是日郡守
以牲醴致祭於潮神而郡人士女雲
集傲倩幕次羅綺塞塗上下千餘里
間地無寸隙伺潮上海門則泅兒數
十執綵旗樹畫傘踏浪翻濤騰躍百
變以跨材能豪民富客爭賞財物其

時優人百戲擊毬關撲魚鼓彈詞聲
音鼎沸蓋人但藉着潮為名往々隨
意酣樂耳瞿宗吉着潮詩云嘉會門
邊翠柳垂海鮮橋上赤欄歌行人指
點山前石曾刻先朝御制詩出郭遊
人不得招相逢都道着江潮今年秋
暑何曾減映日爭將畫扇搖一線初
看出海遲司封祠下立多時須更金

鼓連天動忙殺中流踏波兒壩頭酒
美勸人嘗紫蟹初肥綠橘香店婦也
知非俗客奚奴背上有詩囊沙河塘
上路岐賒扶醉歸來日已斜怪底香
風來不斷擔頭插得木犀花步入重
門小院偏金猊飛裊夜香煙家人笑
問歸何晚已備中秋賞月筵
重九日人家糜栗粉和糯米伴蜜蒸

糕鋪以肉縷標以綵旗問遺親戚其
登高飲燕者必簪菊泛萸猶古人之
遺俗也又以蘇子微漬梅酒雜和蔗
霜梨橙玉榴小顆名曰春蘭秋菊
十月朔日人家祭奠於祖考或有舉
掃松澆墓之禮者八日則以白米和
胡桃榛松乳菌栗之類作粥謂之
臘八粥十五日為下元節俗傳水官

解厄之辰亦有持齋誦經者

立冬日以各色香草及菊花金銀花煎湯淋俗謂之掃疥

冬至謂之亞歲官府民間各相慶賀一如元日之儀吳中最盛故有肥冬瘦年之說春筮鮓以祀先祖婦女獻鞋襪于尊長亦古人履長之義也十二月二十四日謂之交年民間祀

灶以膠牙餠糯米花糖豆粉團為獻丐者塗抹瘦形裝成鬼判叫跳驅儻索乞利物人家各換挑符門神春帖鍾馗福祿虎頭和合諸圖粘貼房壁買蒼朮貫辟瘟丹栢枝綠花以為除夕之用自此街坊簫鼓之聲鏗鏘不絕矣僧道作交年疏仙米湯以送檀越醫人亦送屠蘇袋同心結及諸

品湯劑於常所往來者
除夕人家祀先及百神架松柴齊屋
舉火焚之謂之糝盆煙焰張天爛如
霞布爆竹鼓吹之聲遠近聒耳家庭
舉燕則長幼咸集兒女終夜博戲藏鈞
謂之守歲燃燈床下謂之照虛耗以
赤豆作粥雖猫犬亦食之更深人靜
或有禱灶請方抱鏡出門窺聽市人

無意之言以下來歲休咎是日官府
封印不復僉押至新正三日始開而
諸行亦皆罷市往來邀飲蓋杭人奢
靡不論貧富俱競市什物以慶嘉節
而光飾門戶塗澤婦女衣服釵環之
屬更造一新皆故都之遺俗也
西湖之景天下所稀捫瓦新話曰蘇
東坡酷愛西湖其詩云若把西湖此

西子淡粧濃抹兩相宜已曲盡西湖
情態又詩云雲山已作蛾眉淺山下
碧流清似眼是更與西子寫真也宋
時有張秀才者江西人驟見西湖而
嘆曰美哉奇哉青山四圍中涵綠水
金壁樓臺相間全似一幅着色山水
獨東邊無山乃有百雉雲連萬瓦鱗
次殆天造地設之景也此語雖粗而

西湖面目盡見矣正德間有日本國
使者經西湖題詩云昔年曾見此湖
圖不信人間有此湖今日打從湖上
過畫工還欠着工夫詩語雖俳而羨
慕之心聞于海外久矣故遊湖者挹
山水之清暉以詩酒冶思而已歌童
舞女已非本色而閭巷鄙人以戲子
傀儡雜之溷聒聒聽誠所謂花上晒

視松下喝道者也宋人范景文詩云
湖邊多少遊觀者半在斷橋煙雨間
盡逐春色看歌舞幾人着眼到青山
可以砭針遊湖之病矣

熙朝樂事終

墩

丘陵ニ非シテ地形ノ
少キカク云

畛

ウ子

塍

ク口
塍同

青淄泥

田シブノ出ル
泥

ヨアケトキ

魁黑

クラヤミ
甚黒キシ云

麻

ア
カ

外夷ノ名

安南

アナム

昂交趾ナリ

南方ニハアツク来シ二月種テ

五月歛メ六月種テ十二月或ハ翌正月歛ム雨多

ケレハ稲ヨシモ木ノ長サ一丈二三尺短キモノモ八九尺
種アリ暹羅モモ木ノ長サ同シ

蘭列

西北ノ隅ニテ寒甚ニ深ク井ヲホリテモ水ヲ得

カタク陶器ヲ儲壺兩ノ降ヲ待テ飲食ノ料トス新婦ヲ迎ルニ先壇瓶ノ數ヲ問ト云、

廡 ヒサシ 審事 評定所ノ類

子城 本丸一名 丹城 外羅城 二ノ丸 月城 三ノ丸 又關廂

獲城 馬出シ 磚 ヒラカハラ 瓦 ヤ子カハラ

筒瓦 丸カハラ 同 舖 ミセ 飯店 ハタゴヤ 當舖 シチヤ

鴟吻 日本ノ鬼瓦ノ類 鴟吻 鴟吻ノ類 竜ノ如シテ技ノニツ四ツアル角ヲ鉄ニテ作り頭ニサス明朝ニ用之

格子 シヤウジ

紗稠 紗ニテ四方ノ戸ヲ張り蚊蠅ヲ避ク是ヲ紗稠ト云以レ衣四周スルヲ稠ト云

女塔 ムコ 連襟 アヒムコ 岳父 シウト 岳母 シウトメ

親家 アヒヤケ 尊閨 他人ノ妻ヲ稱ス又尊壺

尊電 他人ノ妻ヲ稱ス又盛電令春

拙荆 己カ妻ヲ稱ス又房下 側室 己カ妾ヲ稱ス又小妾

令郎 他人ノ子ヲ稱ス 令愛 他人ノ女子ヲ稱ス又令嬢 令愛玉

昆玉 他人ノ兄弟ヲ稱ス

豚犬 己カ子ヲ稱ス又豚兒 跨竈 他人ノ子ノ父ヨリ賢レルヲ稱ス

拿週 子生レテ暮年ノ片父母其欲スル処ヲ誡ムル夕メ筆臺

弓失金銀等ヲ並置テ其子ノ心ニ任ヤテ取ラシメテ其
欲スル所ヲ見テ拿週ト云北人ハ拿替ト云

价者 家事ヲ治ムル者 小厮 ガウリトリ

門子 コシヤウ 書手 モノカキ 輿臺 ノリモノカキ 又轎夫

健歩 ヒキヤク 又急足 快手 罪人ヲ召捕ル役ナリ 日本ノ雜職ノ類

割子 人キリ 喝營 トリウリ 畫工 工也

貨郎 トリウリ 夥長 船中ニテ針ヲミル役

大繚 帆シ主ル役 大繚ニ繚トテ二人アリ 杉板子 舟ヲ掌ル役

香公 舟中ニテ香ヲ焼神ニ祈リ又石火失ナトシキツ役

杉板子 舟ヲ掌ル役 頭碇 イカリヲ掌ル役 頭碇ニ碇

直庫 船中一切ノ道具ヲ 掌ル役 財副 船中ノモノカキ

總部 船中ノニカナヒ食物ノ事ヲ掌ル役

耳糠 眼渣 齒垢 又齒塗 奶子 乳也

青盲 アキメクラ 遠餘 ム子スクニシテカム コトナラヌ病

戚施 セナカ高シテ仰コト ナラヌ病セムト云 羊兒風 テンカン

衫 ヒトノシタギ 汗衫トモ云 藍衫ハ上ニモ服ス秀方ノ服也

裕 アハセ 綿襖 對衿衣 日本ノ羽糸ノ如クナル 服ナリ

襪子^{タビ} 襪帶^{タビノヒモ} 被^{フスニ} 日本ノフトン也

兜肚^{ハラカケ} 手巾^{テヌグヒ} 悅也 抹布^{ザウキン}

綿襖^{ワタイレ} 袷^{フクサモノ} フロシキノ類襪同

鞞毬^{ニウセン} 綿羊ノ毛シハサニ集テ弓ニテワタノ如ク

ウチホヤシテ釜ニ入熱湯ニヒタニ取出ニテワタクルヤウニ
ヒトノクニ重子テ上シヒタトフニ何ヘンモ其通りニ
ニテ端シ夕子テ取リソノ夕子メヲ引カニテハリニス
蒿草ニテ染ル也

陳酒^{フルキサケ} 麻糍^{日本ノモチナリ}

羹^{アウモノ汁ナリ俗ニ湯ト云} 豆沙餠^{ヤウカン}
唐音タント云

栗餠^{重陽ニ用ユ}

月餅^{中秋ニ用ユルヤキ餅也麩粉ニテ造リ大中小}

段ニニタニミカサ子ニ五色ノ飾リ物ヲ置挂
花ヲ挿ニ月ニ供スル也

凡魚^{シホビキノ類} 火腿^{家猪ノエダシ寒ノ内塩漬ニシテ松ノ葉ノ煙ニテ}

フスベ乾ニタル物ナリ俗ニ臘^{ラカン}子ト云エダニ限ラズ
肉ヲ乾タルヲ臘肉ト云

倒靨氣^{ビイトロ} 石ヲ練テ造ル

硝子石^{玉ノ如クニヤキタル石ナリ}

赤銅^{倭鉛銅錫ヲ雜テテコシラヘタル金也真鍮ノ類}

紋銀 上品ノ銀俗ニ南鐐ト云

低銀 下品ノ類

細絲 南鐐ノ極品細絲ノ十分一銅ヲ入ル、シ九成ト云

五成ヨリ九成マデアリ九成ヨリ細絲マデ九一九二九各マテアリ日本ノ銀ハ八成ノニニナル

鋼鐵 ハカ子

穀面 ヘウシ 又部面 標 帙 ケツ 俗ニ書套ト云

紅簽 書笈ノ上ニシス紅紙ナリ

簽 ゲダイ

標 ヲケガミ

牙籤 象牙ニテ中キ扎シ作り一部ゴトノ書名ヲカキテサゲシキ見ヤスキヤウニスルヲ云

隔子 ケ罪也又格根 唐山ノ罪九行十七字ヲ定法トス

抽斗 ヒキダシ 篋 俗ニ云タウグシ 風篋ナリ

抵子 クシハラヒ

耳竈 ミカキ 紙寫 イカノホリ声アルヲ風箏ト云

花炮 花火ヲ紙ノ筒ニク、リ藥カゲンニテハ子ルヤウニシ

コ三年ノクレヨリ正月ニテ放ツ所謂爆竹ナリ昔ハ竹ニタリニヨリ爆竹ト云今ハ紙ヲ用ユ炮爆義同シ

烟火 カラクリ花火ニ賽月明ハ玉火 水老鼠ハ子ツミ火

走線ハ系火クルマ火

描金 エ 摻金 ナシデ 軟金 ザウガシ

決拾 決ハユカケ拾ハシニテ決ハ唐山ニテハ五石牙角ノ

類ニテ作ル拇指ハカリ一掛ルナリ 扣 ミカケ

大紅 紅シ入染タル也

二紅 大紅ニツギタル色ナリ

深桃紅 コキモ、イロ 浅桃紅 ウスモ、イロ

牙色 タニゴ色 象牙色トモ云 松花色 ウスガキ

醬色 ヒハダ 沉香色 トノチヤ

茶褐色 クロチヤ 天藍 ナイロ 天青 コキナイロ

真青 コイロ 石青 ソライロ 月白 ウスアザギ

水毛色 ミヅイロ 玉色 北方ノ人ハナイロヲ名ツケテ玉色ト呼

油緑 ミルチヤ

○雁 中国醃治方食^ラ不知^レ食^ク鮮者^シ

○天鵝 ハクテウ鵝曰 中国間有^レ之最^モ少^シ不知^レ其^ノ性味^ヲ

○水葫蘆 コガモ 栗鴨 クロガモ 又鴨鴨

○雞蛋 ニハトリノタマゴ

○杜鵑 日本ノヨリハ声高ク慘^マシ多^ハ夜啼^ノ辺^ニ血出ル血屋上ニ落^ルハ不祥也ト云

○白頭公 シバウカラ 日本ニアルヨリ少^シ天ナリ

○雲雀 日本ノヒバリニ能似タリ

○鷓鴣 シギト訓スルハ非也 日本ノシギ唐山ニ甚多アレ其^ノ名^ヲ不知^ル鷓鴣ハ海辺ニ居ル鳥^ノ子^トリノ類ナラシカ

○石鼠 日本ニ云越後ウサギ也真ノ白兔ハ稀ナルモ

ナリ崇禎年中遠国ヨリ白兔ヲ献スソレモ石鼠ヲ
アヤコリテ白兔ト云石鼠ハ目ノ色兔トカハレリ
ミナカツホ 新麥ノ時多クアルユヘ俗ニ麥鼠ト云

○鯿 頸ニビニリタルユヘ縮項鯿也云 鯿魚ヲマナカツツト
訓スレモ日本ニテ鯿魚ヲ未見

○鰻魚 アワビ 俗名鰻魚貝ヲ石決明ト云

○魁蛤 アカイ 蚌子 サルボウ 唐山ニテ泥中ニ
飼シキ食品ニ充ルナリ

○蟋蟀 コホロギ 唐山ニテ夜其鳴ヲ交テ声清ク
長キヲ取テ百子モ養置是ヲ闘ハシム 絲瓜ノ花ヲ

飼テ養ナリ

○蝦蟆 ヒキカヘ 背ニ凹キカタアルヲ蟾蜍ト云毒アリ

○牡丹 ホタン 一捻紅ハ白牡丹ニ紅ノ飛入アリ玉樓春ハ
午葉ナリ

○黄葵 子リギ 蝴蝶花 ミヤカ

○秋海棠 ホドアリ 日本ノヨリ大ナリ高八九尺花四寸ニナリ
ホドアリ 日シ怯ル

○梅 日本ノ梅花ヨリ香深シ

○桃 日本ノ桃花唐山ヨリ種類多ク花モ勝レリ

○方柳子 五所柳 一名菜柳

奇楠香 キヤラ

冰片ハ生於梅樹一産ス麻六甲アカ

柔佛等ノ州府云

杉スキ

唐山ニテハ庭前ニ栽ルコトナシ古ハ袁山松庭

栽之トテ古今笑之云、

櫻桃

日本ノユスラニ似タリ

竹

唐山ノ竹甚大ナルアリ桶ノ如クキリテ水ヲ汲

棗

日本ノ棗ヨリ葉甚大ナリ

橙子ユズ

日本ニテ柚ト云ハ誤也唐山ノ柚上ニクビレメ

アリテ肉ナシ下ニ肉アリ徑リ六七寸云、柚ニ紅白ニ種アリ紅柚大ナルモノ可比ニ舛器ニ紅柚大ナル

モノ可比ニ舛器ニ

筍タケノコ

唐山ニハ四季ニアリ只七月ナシ八月

ヨリ十二月マテハ竹ノ根ヲ尋子筍ノ少シキソコヨリ

頭ヲ出シタルシ大キナル塚ヲ打カブセ上際ヲヌリコメシク

數日スギテカメシ取テシコセハ筍カメノ中へ生ヒ入りカメ

ナリニ丸ク生ヒマワリテアルナリ是ヲ塚筍ト云ヤワカニテ

味ヨシ正月ヨリハ土ノ中ヨリ芽ヲ出スシ堀リテ食フコレヲ

露青ト云毛笋トモ名クコレヨリ少シ後ヲ燕笋ト云云

四月ノ比シ鼈鬚笋ト云六月ハ鞭笋ヲ用ユタケノコ籜ノ落ル

時分ク鞭笋ト云

撤ヨリ茲ニ至于舜水朱氏談綺ニ見ユ明ノ
人ニテ文恭先生ト号ス

源教中丞の涉幕ハ彰義公承九年
東征の時用ひ了セ給ふ後三年の
亦合戦ハ先ノ度ノ亦役と云二川西の
亦幕と濟陳管ノ川セ給ひ了と云
義教公ハ川西幕と執リ給ひ了
後世彰義田表ハ中丞是村表ハ川西と
傳へ給ひ了 東照神皇表 敬云
命云く曰中丞ハ在彰義の所傳と
雖ト將軍に任セし人ナリ川西ハ懐少

弟百々
 多岐公
 白旗八幡
 此言云
 編者想像
 良辰正敷
 拜見スル
 白地を
 以鳩一
 雙ニシテ
 ナリ明治
 七年旧傳
 即ニハ
 詳見ス

たり以年お傳しそ代にお軍家の
 攸なり故白旗白地八幡の旗号及ひ引兩

の山幕と懐ら七珍子の由云云及長十九年甲寅十
 我公白旗の外故ありて赤地錦旗月言於後府政讓秘傳與之

五月十号拾中納云總教御薨したまひ
 六月廿二日從一位者厚光子かられ七にまふ
 乙酉孝友勢尾冬をホの徳川大臣
 降たりきて人多く捨ふ是捕樹の實ありて
 奇異の物とてあはねと人心怪と好

よりぬと云傳しててか二異異の
 やうかいあも又あやう

府下有司候定の敏庭に古楠樹あり
 彼降たりとてし實多しむまひて風よ
 随く落葉分ち他雨といふ多岐なる
 にこころあてもむらひ候るあは鳥さあ
 啄てそ米異あや交りらんふひのあやう
 雨もあけり

又麥下降りしとてふ打見ればツホムキ辨のこ

少くうておし大にやうううこれも
未実るり来といひるハ梯実の類うて
しれも考ふわぬるれと人々心と
とわし見ふら故こころ始てわぬみハ
いひのうありゆらんあし三六大麻宮五
とよ降しえ悪妻悪娘うと由事
七月甲子井の吏妖怪の云といふ
わゆるいとより天又穀と降せし
天文大成るとこのをくもか類るる

為し我明暦三年に任列未考に赤
小夏方りしとふ所の者んをらより
あしむ人かいられし是も如ゆる
樹実れしゆらん又七月三日四々比
毛臨里しとふ白き毛のいとふこと
捨あすあはこれハむし分所大雷
のほハわすあやりあしと元ノ順
宗の時元統二年正月朔沓梁血と
雨りし三月彰徳法毛とあくせしと

元史に尼くあり又柔本子に元の至正
壬辰に粉針とあり民家の心戸
柱壁の石粉痕あり針のこくろる
す皮を殺と志あり黄冠り天籟
飛しは函冥録の妄之晋陵の虹ミコトコ全
吐し異苑の納り皆方士及夷異
と造て人を欺く類あり於淳熙り
小ハあり由と抽と天ありあり
多し百穀ハ古地あり生し雲也を

人もの成海蒼くたつ天蓋号也と降
さんや地氣上りて雲と云云
て兩名とありて降海け卯何と云
さんありかしこ浴し流すことあり
○崔鴻が前秦録符堅滅燕趙之後自
長安至諸列皆夾路樹槐柳于
里一亭四十里一旅ス行者取給於
塗ニ高資ク販ラ於道ニ云云
これ亦国及中の並ナ木あり樹れ夾路

樹と書て俗々々々ゆん

依台命諸列益各国之圖納公府

元禄十一年戊寅三月十五日下午令

六月二十三日定凡例

諸侯及官吏令其有司数人議之同之
交境者隣国、有司出會或以小圖分其
山川正其界疆六十余列皆同之

十四年辛巳成其功而献之凡春

秋歷四民部省圖帳後又一盛事次

我尾張及封内之國番十月十八日成主百整

或人曰りろに我玉のとき障子

ありやと曰牕の字屏志やりのゆこ

あれに邦主の擯式あり而牕残

化尙ここれ即さなる志やり也

又龍舒居士曰牕紙雖微被人扯

破猶有怒心抄清脩と是也

紅蕉と今俗儒だんとく茶のゆと

す如何曰く類と謂ハ可也だんさく
搗搗トシとシ少シ慮ル一ニ遵ル生ル八ツ牋ノ八ツ念ヲ殊ス
とシりテ所ニ獨ニ搗シ取ル天ノ然ラ者ト是也
為シ惡シ而シ畏ル人ヲ知ル惡シ中ニ於テ有ル善ヲ政ヲ為シ善シ
而シ急シ人ヲ知ル善ヲ知ル即チ是也惡ノ根ヲ還ル初ニ道人ノ
好シ利ヲ者ト逸シ出ル於テ道ノ義ノ外ニ其ノ害ヲ顯シ而シ淺シ
好シ名ヲ者ト竄ル入ル於テ道ノ義ノ中ニ其ノ害ヲ隱シ而シ深シ
聽ク靜ニ夜ノ之ノ鐘ノ聲ヲ喚キ醒ス夢中之ノ夢ヲ觀テ澄シ潭ノ
之ノ月ノ影ヲ窺ヒ見ル身外之ノ身ヲ

竹影掃階塵不動月輪穿沼水無痕
狐眠敗砌兔走荒基盡是當年歌
舞之地露冷黃花烟迷衰草悉屬
旧時争戰之場盛衰何常強弱
安在念此令人心灰

此外おろろ語多し云々記す
契田正縁記和銅元年九月勅造新劔
遣阿倍朝臣多治比真人池守於契田
宮別達祠祭之云云

是今所謂
八劔神社也

按阿倍朝臣闕名考續日本記則名
宿奈磨也續紀四和銅
元年

富貴怕見閑花言已閑則謝適可喜
正可懼尔今有方值豐亨便生驕溢
喜筵慶賞過飾婚喪伎樂声容
沸騰傾動僕器服食珍饈存整
丈無德富貴謂之不祥宜急懼思何
暇誇侈許台仲
家訓

或人曰在年曰民多ハ究困一々貧
窶に迫る者多一々中_ニ仕友の
家_ニ財_ハ欲_レ利_ハ不足_ク去_レ々々毎_ハ復_ク
たり時の然_レ々々世_ハあ_レと予曰
凡そ_ハ應_ニに文明の大乱の後_ハ亦_ハ至
治教_ニこ_レ々々_ハ廢_レれて雅_ハ意_ハ
何_レ々々_ハ事_ハと_レ知_レ力_ハあ_レ々_ハ邪_ハ色_ハ
形_ハ々々_ハ當時人皆_ハ淫_ハ悍_ハ少_ク々_ハ或_ハ多_ク
之_ハ多_ク々々_ハ案_ハ一_ハ世_ハ俗_ハあ_レ々_ハ後_ハも_ハ凡

俗草うびして又七十年以久
糸此わら士を民と刻剥
残暴不にあらざるあり
既
冬月之及つる
貢分と河督すく又民も亦剝
小者し大くハ管督之
初之雨と格く不後故を以て
のりせ水之入り式ハ
之妻子あを之に酷毒
悲啼泣

の声戸こには海逼勒凌
衆と等し
破也農家の産と
充法故に之入る
小者多し
民と剝奪
起たて
威逼せらるる
胡也。かれ何の軍事と

と第一巴^ハ子^コと^ト家^カ内^内の男女治容と
知^チく^ク今^{イマ}衣^イ食^シ亦^モ文^文華^華の教^{キョウ}う^ウ客^{キヤク}と
答^{コタ}へ^ヘる^ルも^モい^イと^トあ^アつ^ツつ^ツる^ルも^モあ^アつ^ツて
只^シ氣^キ力^{リキ}のつ^ツの^ノま^マと^ト先^{サキ}と^トせ^セり^リか^カら^ラ
即^{ソコ}と^ト農^{ノウ}高^{カウ}と^トそ^ソ方^{カタ}小^コ飛^{トビ}て^テ藩^{ハン}紳^{シン}
あ^アつ^ツて^テ日^ヒ久^クく^クに^ニあ^アつ^ツて^テ法^{ホウ}
家^カを^ヲ祖^ソ先^{セン}の^ノ殘^{ゼン}悪^{アク}と^ト以^モて^テ力^{リキ}喪^{サウ}ひ
家^カ没^{ボツ}る^ルつ^ツと^ト凡^{ソドモ}く^ク自^ミ根^ネ心^{シン}と^トい^イふ^フ
悪^{アク}と^ト念^{ネン}と^トす^スと^トい^イふ^フも^モ及^キぶ^ブと^ト志^シす^ス

さ^サら^ラの^ノ故^コと^ト只^シ力^{リキ}他^タの^ノ安^{ヤス}か^カし^シん^ン事^ジと
禱^{イハ}り^リ凡^{ソドモ}俗^{ソク}年^{ネン}に^ニ禱^{イハ}り^リ荒^{アラ}淫^{イン}倦^{ケン}怠^{タイ}
と^ト欲^{ヨク}と^ト及^キぶ^ブと^ト民^{ミン}の^ノ生^シ産^{サン}と^ト者^{シヤ}さ^サふ^フ
及^キび^ビて^テハ^ハ村^{ムラ}民^{ミン}も^モ亦^モ督^{トク}從^{ジュウ}の^ノ時^{トキ}り^リ
ゆ^ユる^ルも^モ不^フ馴^{ジュン}れて^テ遊^{ユウ}と^ト用^{ヨウ}と^ト好^{コウ}嫖^{ピョウ}賭^ト
に^ニ供^{キョウ}し^シ固^コ循^{ジュン}して^テ已^マり^リ産^{サン}業^{ギョウ}に^ニ惰^{ダウ}
は^ハ時^{トキ}高^{カウ}家^カ時^{トキ}勢^{セイ}の^ノ好^{コウ}嗜^シ自^ミと^トい^イふ^フに^ニ及^キ
及^キび^ビ置^チ什^シと^ト云^{クニ}差^サの^ノ勇^{ユウ}と^ト擧^キげ^ゲ術^{ジュツ}ふ^フ
く^クく^クこれ^レと^ト眩^{クワン}と^ト外^{ガイ}飾^{シキ}と^ト極^{キョク}り^リ適^{テキ}意^イ

と事とすこれと以て上下は是る
す息を初るく爰人の金を貸り
て事と辨ど然は又奢御而日又
厚く費す亦月々多し責は家の
徴索ふびしき故よ亦く典質及
士惚恫あしく義と棄て民匿
通さるるといごと殺十年身
の習俗改りしとるく^{カッ}帝
る華^{カッ}流に流れ且
太平時静ふとく人即百年前

倍し物の價一年一年より翔貴し
終り今日横窓の然街に満は
置一期一夕の故うらんや去
きの冬家府下の徳士希此
の亦殺去年減七は志く
糶の價往來に増し
て言し控れハ綿力もけ
時徒にたりぬつとと中
とる飛苦往日に造たり
これ久貧よ志く欠缺
せしうあは少しの有
解ありといとと

蓋るーとんくーり嗚呼いそぐ由く
夏のるよ世の交態とんくも幾たふ
そやもの故よくーく人の為よ愁ふ
海舟のそわして閑るるいと後ろく
毀譽淑慝互ふり存歿否泰目
よこくろく年くれそく市井のいそ
くけるる何くぞとり待春と向く望
たり行むはしつれ林下原上のちと
ろく魚と物と名利の路に馳てあり
るる世とゆとれゆることと家人甲
飛魚とのあーこよあーゆや

十日畫十カキ一水五日畫五カキ一石一カキ六能事相促迫
ゆりことと不受り為戯筆輒成山水
張氏和名志が妙處也甚觀ミタマとろくとよを
てはとも良工のよ殿のそ王献が牛
不真り螻蛄筆希て後妙とけり
延和の益聖堂凡筆と同一
から魚とや

唐さしあや 綸旨ハ知恩院
のそ致

中世ゆし知恩院の濟急と稱し傳ち
のそハ知恩院と稱しと云云
大師行狀
翼頁五十二

祓除詞 是諸神通用之祓也某。兩段再拜

丁來 歲次 太歲 正月次

十二月 國ノ年ハ唱ニ 日數三百五十餘日 國年ハ唱ニ

今月今日 良辰 於 撰定 懸久毛 尊 幾

某大神乃 珍乃 廣前 仁 恐 禮 恐 禮 美

白爰 姓名 奉惶 所者 天地乃

不祥事 内外 過事 穢事 不有者

潔 祓比 清 白 雖 心乃 外 仁

不受 急事 將相接 歟 恐 禮 畏 古 以 禮

支神 登 白 須 僕等 賀 遠祖 仁 座 世 平 奈

御心 不 慮 罪 過 何 如 寬 宥 志 不

給手 登 白 須 事 乃 由 於 幸 久 聞 食 天

平 久 安 幾 惠 美 無 疆 天 保 慈 禎 信 給 倍 登

恐ヲツ禮美 恐礼美 白須

大永三年十一月吉 尾張宿祢仲安
代々相傳

室永六年春社日

正六位上守内藏権頭尾張宿祢仲頼

畧稗詞

極キツメ天カミ穢ケガレ事コト毛モ無ナシ留トモ止ドモ則ナラバ不キタナキ淨ハアラジ不ウチ有ナシ内ウチ外ソト

瑞タニ籬カキ 清キヨ久ク 淨キヨ加カ

直會詞

福サイ於マシ降クダ賜シタマフ事コト簡シホ之ノ奈カニ威キミ儀ミソホヒ及ヒツク々シメリ既ステ仁ニ
醉エ比ヒ既ステ仁ニ飽アケリ福サイ祿ハヒ來キタリ及カサレ

禱祠之意

皆ミナ人ヒト乃ナ祈イノ流リ心ココロ毛モ理コトハリ仁ニ不ノカ違ヒ道ミチ於カミ神カミ也也

納受乎

親義序別信欽哉々々

○本阿弥家の古書と凡し内其二之抄ス

天國

大室年中奉勅造釵奉納尾張國
契田社云々

八釵國盛

一条院御宇号大宮國盛

信景按國盛住尾品欽

宗近

又号吉家蝶丸鵝丸等ノ作者云々

國光

住相列山内鬼丸前鬼丸等作者

吉光

藤兵衛尉國吉子蛛切丸作者云々

外藤

美濃住人平治二年平家尋_三蛛切太刀
青墓長私頼外藤摸造彼太刀送下云々

正宗

号_二岡崎五郎入_一

貞宗

号高木彦四郎

安綱

嵯峨天皇御宇人田村將軍以此作_二太刀
奉_二太神宮源賴光依_二夢想藏我家_一後切

丹波大江山ノ鬼賊云々

尾張二ノ宮 丹羽郡柳庄大縣

正一位大縣名神二座式内本座

国挾士尊

活目入彦尊 謚垂仁

社記曰垂仁天皇御宇鎮座

朱鳥元年立社云云

永正年中田禄丹羽郡樂田村城主織田
彈正左衛門再建

万治二年己亥二月二十七日炎同年七月正造進

紀列高野山四所明神

丹一丹生明神 丹生都姫命

丹二高野明神 丹生丹神云々

二座弘仁十年五月三日弘法大師勸請云云

丹三氣比明神 仲哀天皇

丹四巖嶋明神 市杵嶋姫命

一説丹生明神御子ト云々

二座行勝上人感夢所祭云云

七所明神

才一才二才三才四見上才五天照太神
才六八幡大菩薩才七春日明神

正一位勳八等丹生七所大明神

鳥井額如此然丹生一社本高野
士地ツチ欽公任家集ノ説甚怪誕也

十二王子格子内
祭之

八王子土公 大將軍 皮張神 皮付神

八幡 熊野 金峯 白山 住吉 信シメダ田西宮

百二十伴ノ社

信景接近世伊勢太神宮百二十末社俗
説タガ疑タガ本ト高野名目而習合家取シ之謂フ之
者欽

神皇正統録一曰月讀尊今ノ高野ノ
丹生大明神是也云々

按神名式大和国忍海郡有丹生川社又吉
野郡有丹生川上社宇多郡有丹生社紀
伊国無丹生社伊都郡丹都比女神社是
欽神武紀陟リ于丹生川上用テ祭天神地

祇者乃和州吉野丹生也

○紀易熊野神社孝照天皇二十五年
庚寅現年婁郡始岩田河边有一獵
师其名号阿刀千世一旦入山而獵時射
一熊尋其血趁其迹行至一楠樹下所俱
犬見稍頻吠千世見木上則樹頭有三
月輪千世怪之神便託宣曰朕自西天
來東土欲濟渡衆生汝造祠崇奉千
世便造假殿祭之本宮无量壽佛垂迹

西御前千手觀音垂迹中御前藥
師如來垂迹也云云 正統錄一

予先著熊野考異而闕此說故抄之
將備補遺

琉球国寺院

田覚寺 天界寺 達善寺 相国寺 報恩

寺 是釈迦安置ス 龍福寺 文珠 天王寺 昆沙門 山宗

元寺 慈恩寺 五徳院 龍翔寺 湖音寺

大徳寺 東善寺 西來院 清泰寺 桂林寺

福壽寺 此十二院ハ觀音 西福寺 達忠寺 阿彌陀

天竜寺 東光寺 東壽寺 廣徳院 薬師

安国寺 不動 妙巖寺 地福院 成徳院 地藏

金福寺 虚空藏 普門寺 昔ハ觀音 今ハ彌勒

同神祠

波上權現護国寺。 洋 權現臨海寺。

尸棄那權現神庭寺。 天久權現性元寺。

末好權現満壽寺。 普天間權現神宮寺。

八幡大菩薩神徳寺。 伊勢太神長福寺。

天満天神長樂寺。

右權現と号す祠ハ共に我紀州熊野

權現なりと云々其申取上と初とす

昔濟山の里主と云漢人感得と云

末好ハ彼玉紹運舟五主為泰久の時

天界との鶴翁日本熊野の神と

勸法と天久ハ目源村目源翁感得

の伴ハ懐ハ為泰久の時剣達す天満

天保ハ元十代高元王の附古采村の
林氏大建之天照方称ハ高金後王の附
小公と云人あり明帝より封爵の使
多々附首里都往是の途と國公造
を經に地多け初と立と云

天妃祠

嘉靖十三年の夏國爵の時明使欽差
高澄運凡あり一附天妃あり行々
逸ト地カ國人の祠と建と云

天巽祠

道祖祠

本神祠

カヤカミ山并あり樹を伐て初に附必祈ル治シ島

五島と云ニ界あり力と流と云又あど
里ヶ岳と并ありそ并ハ九月の交
現初と云れとキニテズリと呼け附
シリと云と云山と現す村人王に告十
月に至て鼓をら謳て祭所云又傘
三十餘ツ立ツちるハ高と七八丈徑
十尋計出チ丈サむりいと云
又海并ありシウチキウと稱と古一此
非現す長一丈計棍と浩て肩に掛

ハ類也

大ハ辨蓮社袋中和尚球ニ流里遊
事ニ由彼玉の葵冠位^三馬幸明ニ云
去の清ニ依て彼玉の故と書テ疏
球神乃記是也 天安元年ノ
板五冊也 時明の万曆
三十三年 我交七十
年己巳 四月これと序セリ今
そ一二と抄志く記テの補ニ係ス

○伊勢の子良麻呂^{コラ}の齋^{モライ}ハ月のさかり
知^チル^ルぬ少女也巖^{イワ}屋^ヤの内侍ハ年を過
セ^セ侍^シル^ル 依^カ尼^ツの挂^{カツラ}媛^{ヒメ}ハ代^ト々^ト
号^ナと傳^ツて神^{カミ}切^キ皇后^{クワノ}の宮^{ミヤ}ニ奉^{ホウ}祀^シス
子^コハ媛^{ヒメ}ハ家^{イヘ}主^{ヌシ}とて甚^シ丈^シハ家^{イヘ}日^ヒの如^ニ
男^{オトコ}子^コ生^ナム^ルハ此^{コノ}地^チニ生^ナリ^ル也女子^{メノコ}生^ナレ
ハ中^{ナカ}々^々と家^{イヘ}号^ナと継^ツリ女^メ侍^シル^ルと^シリ也
叶^エノ^ノ系^{ケイ}法^{ホウ}也^也也^也出入^{シュツニュウ}寸^{スン}綿^{ワタ}
少^{オホ}テ制^セ衣^イ也^也帽^{カブト}と載^ノク^ク傳^ツク^ク云^ク神^{カミ}功^{コウ}

皇后三韓沸征伐の時時一は
ませし 山^{カブト}胃と学あやとる

○紀列那智の比丘尼ハ皆少伏とまこし
徳所^ス歌曲と以勸進すり初くあを総
て甚罪^ス信と交殊よ東部多と賣
初くお粉ふ人ありて多く信料と
徳を故一山富てちくるる一在 衆
るりらる

熊地比丘尼とて若ハ不く徳行しけり
遊女と伍と曰くて多とせりとする故と
けり

○伴勢上人 吾光寺上人 契田上人 とり
も比丘尼有り 伴勢^{吾光}院の上人ハ 禪宗
ありて 紫と衣 執方 田吾光寺ハ 淨土宗
ありて 若^エ衣 勅許也 是ハ 凡ハ 又 淨尼
ありて 那智の如く有りて 寺中 吾光
寺の比丘尼 不に 集り 庇尼 多ハ 不義
の女刑とありて 寺の げ 衆と 一 日
入れハ 衆と 罪と 逸し 信を 故 あり
去り 衆と 衆と 刺て 心と 収尼の

わるとも鏡食の比丘尼所も亦石の所
内俗ありといふ故又及くさるりかり
さるりさるり之傳り

伊勢神原四万二千百又十石解春分社
原二万四千百十九石五斗石清れ願六千
七百又十七石賀茂社^上二子七百石解野^下
五百四十一石住吉二千百十六石在野千石
等凡り畿内の神社甚神産多し
者列麻鳩の原二千石

以内三百石大文司百三十石神文寺別當三石
齊其他神人分配せり

下総國若取神願千石駿列富士願
子六百十九石解

三百石大文司百又十石室幢院五百石新宮坂
百八十石法非人配當と云々

信列戸隠上流訪者千石^{下の千石} 五石^{五石} 列
大社五石石豊列宇佐千石等法玉の
非原抄下及了

○日光山一万二千六百石 輪王寺宮 紀列

高野山二万石 伯列大山三千石 吾々大山寺学乃 檀那院領也

出羽国立石寺 宝珠山 阿闍院 千四百二十石 天台

同国最上成就院七百八十九石 眞同国

山形光明寺千七百六十石 時衆

光明寺は探察使將軍修理亮兼頼 可成類程多し 本願の地是れハ元上家の祖也

況や接列天王寺和列法澄寺等の

勝區山門三井及ハ五山等の寺産知

悉増上以下の蓮社を領亦費許そや

世の凡俗よくと云い 佛士利とのを係る

悉依るるとハ玉の費と云あくるも徳を

多く智もよく偏し 姦佞の邪人時

わすん大福と食茶ハ又玉家の費と

あくる志くめりや

○ 神名式加賀国石川郡 白山比咩神社

按すハ白山今社あり由り属す故白山

賢聖院二百石と領せりこれハ加賀玉

白山 ミラヤマ 積 八七十四石也故加越两国此

山と薄い詠よ及ひしもす所より
とりや今ハ友玉の主の主維といふれ
て冥糸の沙流るりとりや凡そ平
泉寺越前白山寺賀須原寺名白
山ハ我山なりと名す

越知山大谷寺願百石ハ越前玉也恭澄
仰閑祖の地也白山の地とあり
始ハハ師ナク其畧のせり
元亨新書等よ見たり

○後魏の景明年中宣武帝年号海陵の貴
尋先キに居家卓貧一旦忽凡雨餓を
免して其家カ至カ富カ鉅万に至
て其年沸せらる五行記汀列の林氏羅仕
の存一日天玉に穢とありす林氏天に
侍て曰非常の事ハ必禍と為ナセす迷ふ
止ヤミハ林氏カ後カと声に應じて止カ塚
富と保てり録神カけカ二カ三カ品カ貪欲カと
私足とと云のそ支非者の事ハ必禍

と寫と出と云りの人能理舎すく
是怪異のくに非ず凡そ賤吏且名位
に異り卓貪忽財利と得り如き
世人大槩これと云くやゆらう
然るもそ終る所と凡れハ必禍
困しと愁に死する者古今万々

○范文正公一書生り為に薦福寺の碑と
打せりりんうて一夕雷轟て其碑石
と撃破せりり墨客揮犀及昨非

菴の日黨等に出^ッ爲^レ命の人の為^レこれと
説^フころも

○宋の嘉祐申楊偕と云ひ^{漢列軍}人^{馬判官}乃^不
術士^カ遇^リり彼云君世に瓦石と化^ス
て黄金と為^ル去^リあ^リと知^ルりやと
然^レて偕又^ニこれと試^シゆ^ニ既^ニ驗^スあ^リ
術士は術と換^ヘと云ひ^ニ偕曰
吾ハ吏祿^ニ後^ニふ^ルんを化^シ金と^スころと
せんやと術士曰子の志若此吾所及^ス

非と戸とあてゆくところと失せし由
宗書に足るなり嗚呼名位賦利分
に安し天小醜て黄緑當謀せし
去せよ少く宗故よ名と遊ひ位と
求め賦利と貪るる世人人骨髄
入ておぼるる今の人豈術士所
為と侍魚けんや教るに爐火丹の術
と以てせば必丹録ミヤカとも行使し七人
人丈楊氏志に死ミヤカるる一人也

己の冬我府下令具師父子 仰見金體云々
そのまゝハ云々

似金と似るるわらわれて御するは侍
頃日記の新銀甚品とあり世に終ふ
こゝに錢貴るる日に甚く振舟に入て
錢九百俵文と以て銀十五泉に充異
邦も亦錢の多しわらわるといふ人あり
予曰株宏の自知録に錢の多しあり
たとへハ百錢といふ所は銅錢百文錢
銀十分に準るると云ひて不論錢貴錢

長秋記

長秋監ハ皇后宮大夫唐名
皇后太后太史師時記也

西記

西ハ太納言ヲ西相ニ唐名す
權太納言光頼ノ記也

龍記

龍ハ中納言と龍作と唐名す
權中納言光雅ノ記也

右のどしと書目程多し門庭の書或
ハ作人などには唐名と書す 毎毎又あり
唐名呼とひくるといふ處さやも
う一若之異那の官とあつてぬる

あまると云く冬儀とハ元とよハ朝廷
とくおし乃稱呼なり異那のハ元と
其職名列なりこれハ官負冬儀
ハ入りしよりけし号あり又宰相と
よハ大と遠タカひゆれとも古今冬儀と
宰相と稱す乃とよとるりし
たれりわやゆりとし冬儀と呼ぶ世あ
里や万ッわやゆれゆりハ誤りと知りて
俗俗と違違ハぶる人こそやとらふよゆ

後世人主怪と崇ひ異と好巫覡を妄誕に惑ひ先王の禮典と捨て非礼と爲去多し上古と以ともけ幾あり堯重黎に命きて地天の通と絶と以て范氏曰惡神人雜糅巫覡矯妄而誣天罔民也鳴季世主上カミに昏民下を迷て神と蹟し礼と瘞す遠き戒め省さくと痛むし老子以道カミ灌天下去其鬼不鬼と云ると朱子

釈して曰以道治世則不正之鬼不神而消鑠此其理行正當事人自不作怪棄常則妖真と以此世の所謂鬼神奇怪の事と云ふ也 我皇太神宮ハ国朝の宗廟なり神仙胡佛の類に非ず奇怪灵异と以てこれと尊者をわし故臣下の私幣と禁し延喜式及清原頼業勅文之意 巫覡は道と辟神宮古記之意祓冑内人等者礼官而不巫覡者流也 祭に礼と正して

官其人何をこれ 天子平と本とて
をど忘れたゆへに誠欲後世王道
脩明るす現僧妖術と以上下と
誣此以中世紀列熊地神社と以て
靈何をと王以下悉謂して福と
祈熊地神社に非ざる漢神に甚てハ縣歷
天竺の神に非ざる其説に非ざる
二三百年の後人倅勢の神を言ふ
てよりして熊地詣其跡と終て
靈るるより似たり朱子所謂廟食

の神浸久志て亦能散と此類朱子語類三謂南康廢廟
今法人倅勢神をハ玉家の宗廟る
ると志す空志くそのを熊野
系信よ效て黠胡の廟に准し神異
と稱し奇怪と傳つて義のりく礼と
すく毒りよ宮門よ入て者く私欲と
祈所於此祓豆内人ホの礼官りつと
巫覡の賤よ落て祈禱と業より陰
陽者流習て祓除と業りり又移而

年よ及一巳控中こころ乙酉の雲例
よるも糸宮の人法玉より多しり
が至四月の比より糸師非異とよ
るすうくあうす武ハ救十里の雨成
二三方よ仕還ち一後あを河もハ死せ
一者と葬一塚を人つううく勢列
よりかへり一異あを又ハこくにう被の
大麻宮路り一又某の如一日大麻と
齋せ一等の怪況百を以救一ツ身

却級寧樂ハこころにいか一幾内一財
又妖異の言と云をあう一法入狂也
あうとく人の妻あ子たふ去僕従る事
いとあとも乞すあをうけあうく
あしとろろよあをえ糸僧又は
又六集の童社とも人の行よつと
ち一家のの多一富人のうと好ま
彼あよ種とあをえをとせす
よ家おとらとあとおおて被是あ

其法を後小の法玉も亦甲類の怪
矣といひて糸文の志多ありり傳り
糸も亦や可傳りよと云ひし可とこ
しのごとく詔列甲やりにひ傳り
をやう志て老少傳といひまの著
よるすても傳りて度舎延佳の寛文
六年又ありしやち糸文糸異記春
に多の糸瑞糸異との也傳りたれと
史につきて可く糸傳の多かりしや

るしむし唐の玄宗の時楚州の
尼去如宝玉と天糸又獲しとて獻り
る又宋の玄宗の時天糸宮内
泰山等は降りしとて麻ありたり
といふは似る欽王欽王等は天瑞あり
と云ふし小孫爽獨り妖とありて帝
の問は答へけりかして天書といふを授
りし臣問孔子曾て曰天河と云言哉
天既言淡するしといふ書あらん

やとらるる實正言とらるる魚一我玉若
より神宝天降の説巫祝僧家より
い一也其中後一条院長元七年八月祭
主輔親大弉又よ糸筆サンの附弉の
松樹より碧玉一顆獲た也朝よ奉
て赤瑠とのくられは賀あてて輔
親と從三位ありてりけれけりや
又俊宗坊重源大寺の大勸進職に
補せよと祈請の爲よ二所を弉又よ

後りりしに矣爰あてて二所もに
白珠と拾りりし其玉一枚仁和寺小
細女一枚ハ弉の二品の糸よ拾られ
とるし橋季茂ウ記よ見くより又一
修院寛弘二年九月武藏玉日比谷
邑ハ幣帛及ハ大牙降王且ッ詫宜ノ
事あり故祠と立てこれと奉す
今赤部芝の神明祠是也とぞ又後
土清の院延徳元年三月及ハ十月

東洛吉田山一を神文飛うるせ給ふ
け故よまゝ實の事神体なる神宝教多
光と放てりりしとせられたるはと兼
俱より密奏志て今神明の祠とて
又作勢あるの神宜お訟懐となく
彼謀計と以て上と圖ミけるとて愁訴
しつれは其祠と破却せられり
これ等ハたよ神室ありけること流
り又後陽成院天皇十九年八月

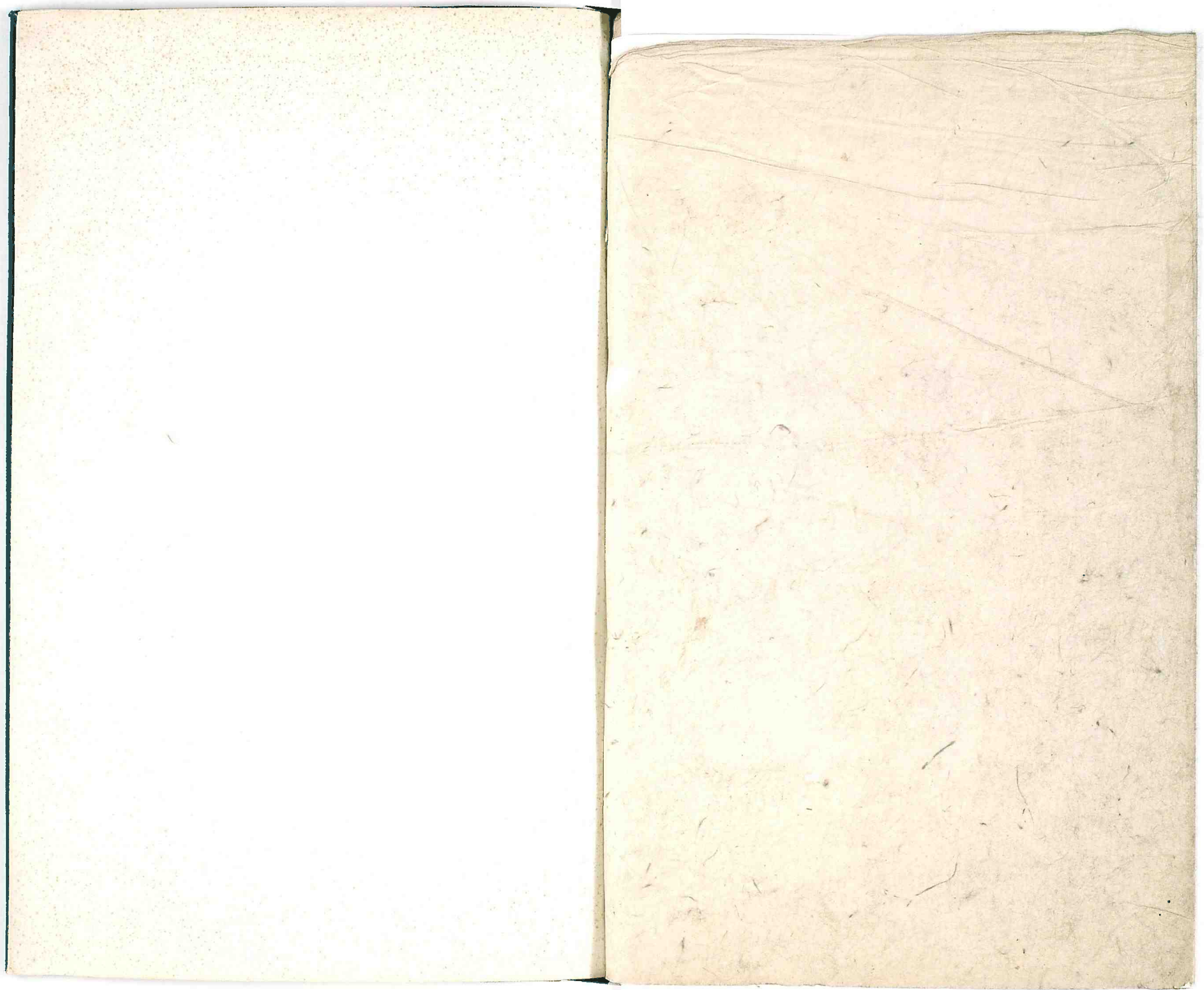
予圖上記
悉記之

九々大神文作勢玉地上山一を物々
せ神しくけりとして他宜の事あり奇
怪の事異とも多く云傳一て其月
の亦の事よ神明山田よ還たある
屋し必天地震動ありてさ中を
流りむるむる故話人おとろし
がしとく村より躍るとなりける
日月亦の事大風ありて暴風を流
海鳴山動しぬ神明還たるりて

人恐懼しける徳主とも小風ぬと云
乃しかりなれハ天下皆踊と漲て
鉦鼓歌謡ら沸こよみらけらとるん
これ徳州也と云り立て侍勢のそと
申せし説と也 慶長談海よ

十

徳州 徳州



愛 知 県



1103280379